

基準 4 学生の受入

(1) 観点ごとの分析

観点 4-1-①： 教育の目的に沿って、求める学生像や入学者選抜（例えば、準学士課程入学者選抜、編入学生選抜、留学生選抜、専攻科入学者選抜等が考えられる。）の基本方針などが記載されたアドミッション・ポリシーが明確に定められ、学校の教職員に周知されているか。また、将来の学生を含め社会に公表されているか。

（観点に係る状況） 平成16年度以前には、従前からの教育目標をもとに求められる学生像を入学希望者に間接的に示していたに過ぎなかったが、平成17年3月に準学士課程及び専攻科課程のアドミッション・ポリシーを策定し、教育目標に合致する学生像を容易にイメージすることのできるものとした。

資料 4-1-①-1

本校の入学者受入方針（アドミッションポリシー）

本校の教育理念は、将来性ある人間性豊かな「実践的研究開発型技術者」を養成することです。このため、本校の具体的な教育目標を次のように定めています。

1. 人間形成に必要な一般教育科目をできるだけ幅広く展開し、豊かな教養と幅広い思考力を養う。また、外国語を鍛え外国文化に対する理解力を養う。
2. 若く新鮮な感性と実験・実習等を重視した体験学習により、豊かな創造力と行動力を養う。
3. 工学基礎及び専門基礎をしっかり身に付けさせ、広い専門的視野と総合的判断力を持たせる。
4. 自主的に思考し、学習し、行動する習慣を身に付けさせ、心身の健康維持、増進に努めさせる。

求める学生像 —旭川高専は、こんな「君たち」を待っています—

- 地球環境、人に優しいものづくりに関心のある人
- 科学が好きで、未知のことにチャレンジする気構えのある人
- いつも夢を持ち、その実現まであきらめないで努力を惜しまない人

(出典 ウェブページ)

資料 4-1-①-2

専攻科のアドミッションポリシー

旭川工業高等専門学校専攻科は、高専における5年の課程を基礎とし、工学に関する知識や技術をより深く学び、これからの社会を支える工業技術のスペシャリストの育成を支援することを目的としています。また、専攻科入学生は、本校の本科4、5年と専攻科のカリキュラムで構成される「環境・生産システム工学」プログラムの履修が義務付けられます。

そのため、高専を優秀な成績で卒業したか、あるいは、同程度の学力を有する次のような方を受け入れます。

- 科学・技術に関する幅広い知識をより深く習得し、社会の発展に貢献できる技術者を目指す方
- 目的意識を持ち、自分の能力を高める努力のできる方

(出典 ウェブページ)

これらのアドミッション・ポリシーはウェブページに掲載するとともに、学校要覧、平成18年度入学者募集要項、専攻科課程入学者募集要項、編入学者募集要項及び専攻科パンフレットに記載し、さらには中学校訪問や入試説明会でも説明し内外への周知に努めている。学内においては主として中学校の新学習指導要領によって移行した観点別絶対評価に対応した選抜方法を検討する入学者選抜委員会や専攻科委員会、さらには各学科の議論の中で教職員へ繰り返し提示され浸透が図られている。

(分析結果とその根拠理由) 本校の準学士課程及び専攻科課程のアドミッション・ポリシーは平成17年3月にそれぞれ制定された。既に平成18年度入学者募集要項、専攻科学生募集要項、編入学者募集要項、入学者の選抜方法を解説したパンフレット等の印刷物及びウェブページで社会及び学内に公表されている。さらに、これまで継続的に実施してきた本校、市内5か所及び道内5か所の拠点で行われる進学説明会、6月から順次行われる中学校訪問の機会を利用して説明・周知する予定である。専攻科課程については、本校準学士課程の学生及び他高専に加えて、社会人に対しても広く門戸を開くために、旭川市内の企業に専攻科案内、ポスター、募集要項を配布し、さらには地域企業との連携を図るために設立された旭川工業高等専門学校産業技術振興会を通して周知を図っている。以上のように、アドミッション・ポリシーは十分に周知されていると考えられる。

資料4-1-①-9

専攻科課程募集活動についての該当箇所

学生募集にあたっては、本校のホームページに募集要項を掲載するとともに、別途本校の本科生と他高専の学生及び社会人を対象に募集活動を行っている。

本校の本科生に対しては、毎年第4学年を対象とした専攻科説明会を開催し、専攻科の教育内容や入学案内の紹介を行うとともに、担任教官を通じて進路指導の際に専攻科の特徴・内容について周知している。

他高専の学生については、専攻科のパンフレットとポスター、学生募集要項を全国の高専に送付し周知するとともに、特に北海道内の他高専には専攻科長が出向き、説明会を行っている。その結果、平成12年度は苫小牧、平成13年度には苫小牧、函館のほか、福島、さらに平成14年度は釧路、函館、八戸、群馬、鈴鹿の多くの地域からの志願者及び入学者を確保している。

社会人については、旭川市内の企業100社に専攻科案内とポスター、募集要項を配布するとともに、地域企業との連携を図るために設立された旭川高専産業技術振興会の講演会等で案内を行っている。文部科学省の中央教育審議会等の答申で生涯学習に対する要望が強まっており、高専を卒業した後、社会での経験を経た上でさらに専門的な事項を学ぼうとする学生に対して広く門戸を開いているところである。

(出典 平成15年度自己点検・評価報告書 79-80頁)

観点4-2-①： アドミッション・ポリシーに沿って適切な学生の受入方法が採用されており、実際の入学者選抜が適切に実施されているか。

(観点に係る状況) 準学士課程ではこれまでは理数系科目に興味・関心が高く、適性のある者の

入学を期待するにとどまっていたものの、進学説明会や中学校訪問などを通じてこの点は十分に理解されており特に問題となることはなかった。学力選抜では学習点を学力点とほぼ同じ比重として扱うことで「自主的に思考し、学習し、行動する習慣」の前提となる継続的な努力を積み重ねてきた学生を選抜してきたが、これは5年間の一貫教育に必須な要素であると捉えていたためである。また、工業系分野の学習に不可欠であると考えられる数学の能力を確保するために、学力試験においていわゆる「足切り」点を設定し、これに満たない者の合格を基本的には認めないという方針も設けていた。しかしながら一方、教育目標にうたっている外国語能力、実験や実習に対する適性、専門的分野に対する資質などに直接結びつくような選抜方法は十分に確立されてはいなかった。特に、推薦選抜及び学力選抜において科目間の傾斜配点を導入するなどの措置は取っておらず、教育目標に沿った方法を具現化する方策は必ずしも十分ではなかった。しかしながら、こうした諸問題については下記のように選抜方法を大幅に改正し既に対応済みである。

資料 4-2-①-1

「入学選抜方法」改正の際の会議録

【平成18年度以降の入試制度について】

委員長から、前回の入学者選抜委員会において確認された、平成18年度以降における入試制度の改正点について、再度、各学科（科）において確認の上、今回結論を得ることとしていた旨説明があった。

次いで、各学科（科）長からそれぞれ報告があり、審議の結果、前回確認されたとおり、以下の6点が了承された。

改正点

- ① 確約書については、名称を「入学意志確認書」等に変更の上、引き続き提出させる。なお、合格発表に当たっては、入学意志確認書の有無に関わらず、当該年度の志願状況を考慮して決める合格ラインまで全員合格させる。
- ② 合格者決定の参考資料とするため、志望校順位アンケートを実施する。
- ③ 志望学科については、推薦選抜は現行どおり第1志望学科名のみ記入させ、学力選抜は第4志望学科名まで記入させる。
- ④ 推薦選抜の出願資格のうち、学業成績については、中学校3年間における学業成績の5段階評定の合計が114以上又は第3学年における5段階評定平均の合計が38以上とする。
- ⑤ 前項のうち、第3学年における5段階評定については、指導要録に準じるものとする。
- ⑥ 推薦選抜において提出させている学業成績一覧表については、参考資料として引き続き提出させる。

なお、委員長から、今回の改正は本校のアドミッション・ポリシーを踏まえた入試方法にするためであり、検討過程で出された意見等については、今後の入試結果等を勘案しながら検討していくこととしたい旨説明があった。

引き続き、委員長から、今回了承された改正点を基に平成18年度募集要項（案）を作成の上、近日中に入学者選抜委員会を開催し、内容について審議願う予定である旨説明があった。

(出典 平成17年度第1回入学者選抜委員会議事要旨)

「入試制度検討資料」の抜粋

学力選抜		
検討事項	平成17年度まで	平成18年度から
志望校調査	なし	入学願書で志望校調査（進学先の志望順位を記入して下さい。旭川高専／公立高校／私立高校／上記以外の学校）
学力試験科目数	5科目	変更なし
傾斜配分	学力500 内申540	（学力）英語／数学／理科を2倍し800点 （内申）主要5科目を2倍し、3か年の合計を210点のほぼ4：1にする
数学の足切り	あり	廃止
希望学科	第3希望まで可	第4希望まで可

推薦選抜		
推薦選抜の定員	40%	変更なし
推薦選抜の学習点での基準	3か年で108以上、 あるいは第3学年で 36以上	3か年で114以上、または第3学年で38以上
推薦の志望学科	第1希望のみ	変更なし
希望学科	第3希望まで可	第4希望まで可

（出典 平成17年度第1回入学者選抜委員会資料）

また、専攻科課程では推薦選抜、学力選抜（前期、後期）に加えて、目的意識を持った幅広い人材を求めるために社会人特別選抜も行っている。特に推薦選抜では準学士課程での成績以外にも、TOEICスコア400点以上や各種資格検定の合格、あるいはスポーツ以外の分野で全国的な業績を持つことを推薦条件にし、志望動機がはっきりして、勉学意欲の高い者は定員の5割程度にこだわらずに積極的に入学させることとしている。

専攻科学生募集要項の抜粋

推薦による選抜

1. 出願資格

.... 下記のいずれかに該当し学校長の推薦する者。ただし、旭川高専の学生は、出身学科の学科長が優れていると認め推薦したものとする。

- (1) 出身学科での成績がクラス順位上位1/2以内の者（1学年から4学年までの順位平均上位1/2以内の者、または4学年の順位が上位1/2以内の者）。ただし、クラス順位が1/2から2/3までの学生については、学生個々の資質を総合的に判断して推薦できるものとする。
- (2) 高等専門学校在学中に特別な資格を取得した者、あるいは顕著な業績のあった者
資格 ※証明書等を添付のこと
 - ・TOEICスコア400以上
 - ・工業英検3級以上
 - ・実用英検2級以上
 - ・基本情報技術者など
 業績 ・全国レベルの大会で表彰を受けた者（スポーツ系を除く）

（出典 平成18年度専攻科学生募集要項1頁）

(分析結果とその根拠理由) 準学士課程においては平成18年度入学試験から選抜方針を細部にわたり大幅に見直し、新たに設定したアドミッション・ポリシーと従前からの教育目標に整合性を持たせた選抜方針を定めた。具体的には、これまでは学力点(学力試験での点数)と学習点(内申点)をほぼ同じ比率で取り扱ってきたが、中学校での絶対評価導入によって学校間の評定平均値に大きなばらつきが生じ、評価の客観性に問題が生じてきていることと、アドミッション・ポリシーに沿った学生を確保することの2点を理由として、(1) 学力点では英語、数学、理科について、(2) 学習点では主要5科目(国語、社会、数学、理科、英語)の評価に対して傾斜配点を導入することを決めた。

資料4-2-①-4

絶対評価によると思われる学習点(内申点)の影響に係る資料
資料1 平成16年度 入学者の内申点について

内申点合計(9科目, 135点満点)

	1999年度	2000年度	2001年度	2002年度	2003年度	2004年度
機械	102.4	100.5	98.9	100.4	106.7	108.1
電気情報	108.7	106.2	106.2	103.8	108.4	106.1
制御情報	108.4	110.3	110.7	108.8	108.9	105.0
物質化学	108.1	105.4	99.9	103.6	106.7	103.7
全体	106.9	105.6	103.9	104.2	107.7	105.7

3年内申点-(2年内申点+1年内申点)/2

	1999年度	2000年度	2001年度	2002年度	2003年度	2004年度	2004年度*
機械	-0.1	-1.2	-0.3	-0.5	3.7	2.6	3.3
電気情報	-0.1	-0.3	0.0	-1.0	2.0	1.8	1.5
制御情報	0.7	-0.6	-0.7	-0.5	2.6	2.3	2.9
物質化学	-0.8	-0.1	0.3	0.2	3.0	1.7	1.9
全体	-0.1	-0.6	-0.2	-0.5	2.8	2.1	2.4

ただし、2004年度* は(3年内申点+2年内申点)/2-1年内申点

総合点に占める内申点の割合(学力入学者)

	1999年度	2000年度	2001年度	2002年度	2003年度	2004年度
機械	0.56	0.56	0.56	0.56	0.57	0.57
電気情報	0.55	0.55	0.55	0.55	0.56	0.57
制御情報	0.55	0.56	0.55	0.56	0.57	0.59
物質化学	0.56	0.56	0.57	0.56	0.56	0.59
全体	0.56	0.56	0.56	0.56	0.57	0.58

(出典 平成16年度第13回入学者選抜委員会会議資料)

また、平成16年度の推薦選抜入試までは面接結果をA, B, C, Dの4段階で評価し、これを合否判定の参考資料にすることとどめていたが、平成17年度からは面接結果を合否の判定に具体的かつ明確に反映させるように数値化し学習点に加算している。これにより、現在は調査書からは読み取ることのできない意欲や適性を合否判断に反映させることが可能となっている。以上のことから、準学士課程では中学校の学習指導要領の改訂、社会の変化、高専の独自性を活かす取組などに、より適合するように、これまで用いていた選抜方法を見直しており、適切に入学者選抜が行われている。

一方、専攻科課程においても、JABEE認定要件として設定した語学力による推薦を認めたり、学力選抜で課していた専門科目の学力試験を3科目から2科目に減らし志望者の負担を軽減するなど、より総合的な視点に立って選抜を行えるように選抜方法を改訂するなどの対応を継続し、適切に選抜が行われている。

観点4-2-②: アドミッション・ポリシーに沿った学生の受入が実際に行われているかどうか

を検証しており、その結果を入学者選抜の改善に役立てているか。

(観点に係る状況) アドミッション・ポリシーを制定して公表したのが平成17年3月であり、アドミッション・ポリシーに沿った入学者の選抜が行われているか否かの検証はまだ行われていない。しかしながら、以前から入学者については中学校での学習成績、入学力試験での成績、入学後に一部教科で実施している実力診断試験及びその後の1年間の中間・期末試験での成績の推移や相関関係の追跡調査を行っており、その結果を踏まえて平成18年度からは入学者学力選抜における学力試験結果を重視する方向性が出された。その根拠としては、中学校で絶対評価が導入されてから、第3学年での学習点が第1, 2学年のそれよりも高くなる傾向が明らかになったことが挙げられる。結果的に絶対評価の導入による学習点の影響を抑えるように入学者選抜方法改善の対応が既になされている。

(分析結果とその根拠理由) 入学者選抜方法の変更は社会に十分に周知された上で実施されるべきものであり、また頻繁に変更があつては社会に混乱をもたらすことに繋がるので、本校では5年ごとを目処に見直しを行っている。その改訂作業の十分な資料とするために入学者選抜時の各種資料と入学後の成績の推移を毎年記録・分析している。既に中学校学習指導要領の改訂などの社会情勢の変化に対応すべく大幅な選抜方法の見直しを済ませ、平成18年度入学者選抜試験から、採用することとしているなど、適切な改善を行ってきており、十分な検証が行われていると考えられる。

観点 4-3-①: 実入学者数が、入学定員を大幅に超える、又は大幅に下回る状況になっていないか。また、その場合には、これを改善するための取組が行われるなど、入学定員と実入学者数との関係の適正化が図られているか。

(観点に係る状況) 過去5年間の実入学者数は準学士課程では入学定員160名を若干上回る程度で推移し、また専攻科課程でも入学定員16名に対して平成17年度を除いて平成13年度から平成16年度までは17人から22人で推移し定員を満たしておりほぼ適正であるといえる。準学士課程では、入学定員に対する志願者数が平成16年には1.6倍とやや下がったが、訪問する中学校数を増やしたり、校長自らも中学校訪問を行うなどの工夫を取り入れたことにより、平成17年度の志願者数は回復している。また、学力選抜では、これまで「入学確約書添付制度」を採用することによって、公立高等学校等との併願受験者中の合格者の入学実数の見積もりを行ってきたが、平成18年度入学者選抜からは名称を「入学意思確認書」と改め、形式も志望校種(旭川高専、公立高校、私立高校、その他)の順位を記入するものとし、より主旨が分かりやすいものに改訂した。また、学力選抜では従来の第3希望まで志望学科を願書に記入できるものから第4希望まで記入できるように改め、本校に入学意思を持つ者を少しでも多く合格させる方法を導入することとした。さらに入学者募集に関わる説明会や体験入学等の活動の他に、本校の特徴を広く一般に知ってもらう機会として夏期・冬期休業期間などを利用した小中学生向けの体験学習を中心とした公開講座、一般社会人向けの各種公開講座も直接・間接的に入学希望者の確保や拡大に寄与していると考えられる。

資料 4-3-①-1

準学士課程の入試状況

準学士課程過去5年間の推薦選抜による志願者数と入学者数等の推移

		H13年度	H14年度	H15年度	H16年度	H17年度
機械工学科 (機械システム工学科)	志願者	8	9	27	19	29
	倍率	1.0	1.0	1.8	1.2	1.8
	入学者	8	9	15	16	16
電気工学科 (電気情報工学科)	志願者	16	17	29	23	36
	倍率	1.0	1.1	1.9	1.4	2.4
	入学者	16	15	15	16	15
制御情報工学科	志願者	26	21	25	18	19
	倍率	1.7	1.3	1.7	1.1	1.6
	入学者	15	16	15	16	12
物質化学工学科	志願者	7	14	23	14	23
	倍率	1.0	1.0	1.5	1.0	1.8
	入学者	7	14	15	14	13

準学士課程過去5年間の志願者数と入学者数等の推移 (含推薦選抜)

		H13年度	H14年度	H15年度	H16年度	H17年度
機械工学科 (機械システム工学科)	志願者	54	62	91	62	80
	倍率	1.3	1.6	2.1	1.6	2.0
	入学者	42	40	43	40	41
電気工学科 (電気情報工学科)	志願者	64	70	96	66	91
	倍率	1.6	1.8	2.2	1.6	2.1
	入学者	41	40	44	42	44
制御情報工学科	志願者	91	78	82	67	73
	倍率	2.2	1.9	2.0	1.6	1.7
	入学者	41	42	41	43	43
物質化学工学科	志願者	52	84	82	67	80
	倍率	1.2	2.0	1.9	1.5	1.9
	入学者	43	42	43	44	42
合計	志願者	261	294	351	262	324
	倍率	1.6	1.8	2.1	1.6	1.9
	入学者	167	164	171	169	170

(出典：平成17年度第1回入学者選抜委員会議資料)

資料 4-3-①-2

専攻科課程の入試状況

専攻科課程過去5年間の志願者数、入学者数等の推移

		H13年度	H14年度	H15年度	H16年度	H17年度
生産システム工学専攻 (定員12)	志願者	13	25	19	18	10
	充足率	1.1	1.6	1.5	1.0	0.4
	入学者	13	19	18	12	5
応用化学専攻 (定員4)	志願者	4	3	2	6	7
	充足率	1.0	0.8	0.5	1.3	1.3
	入学者	4	3	2	5	5
合計	志願者	17	28	21	24	17
	充足率	1.1	1.4	1.3	1.1	0.6
	入学者	17	22	20	17	10

(出典：平成17年度第1回入学者選抜委員会議資料)

資料 4-3-①-3

公開講座一覧

平成17年度旭川工業高等専門学校公開講座 受講生募集一覧

No.	講座名	期 日	会 場	対 象 者	定員	受 講 料	申 込 期 間
1	パソコンの組み立てとインターネット活用講座	7月25日(月)～ 7月26日(火) (2日間) 13時～17時	本校	中学生以上	10	500円	7月4日(月)～7月19日(火)
2	3次元CADシステム入門	8月8日(月)～ 8月11日(木) (4日間) 18時30分～20時30分	本校	技術者	15	6,400円	7月19日(火)～8月1日(月)
3	Business Negotiations in English	9月6日(火) 9月8日(木) 9月13日(火) 9月15日(木) (4日間) 19時～21時	本校	社会人 (日常会話に支障がなく、英文レターの書ける方)	10	6,400円	8月16日(火)～8月30日(火)
4	夏休みワクワク科学実験室 －電気を作ろう－	7月27日(水)～ 7月28日(木) (2日間) 13時～17時	本校	小学生～中学生	15	500円	7月6日(水)～7月20日(水)
5	音階の数理～ドミソが「ハモる」理由(わけ)	8月26日(金) (1日間) 18時30分～20時	本校	社会人 (高校生以上)	20	500円	8月 5日(金)～8月19日(金)
6	「初心者のための機械実習体験シリーズ」 溶接体験入門	平成18年2月20日(月)～ 2月24日(金) (5日間) 18時30分～20時30分	本校	社会人	10	6,400円(予定) (傷害保険料別途)	平成18年1月31日(火)～2月14日(火)

(出典 ウェブページ)

第4学年の編入学者数は、ここ3年ほどは5名程度と、やや増加傾向にある。編入学後は特に専門学科において徹底した個別指導による補習が行われており、学力の向上を助ける体制ができています。このような編入学生に対する支援体制が高等学校など社会に認知されることとなり、編入学者が漸増しているとも考えられる。また例年、第3学年修了時に進路変更のために退学する学生がいるが、編入学者が結果的にこの部分を補充する形にもなっており、副次的な意味合いながら編入学制度が定着している意義も大きい。さらに平成17年度からは近隣の工業系を中心とした高等学校へ編入学制度について説明に出向く取組も始めている。

資料 4-3-①-4

編入学の状況

過去5年間の編入学試験志願者数、入学者数等の推移

	平成13年度	平成14年度	平成15年度	平成16年度	平成17年度
志願者	4	3	6	11	8
合格者	1	2	5	5	5
入学者	1	0	5	4	5

(出典 学生課資料)

一方、専攻科の入学者募集に関して、社会人特別選抜者の入学確保のために、旭川工業高等専門学校産業技術振興会会員企業を対象に「学位取得と生涯学習の機会を提供する場としての専攻科」への入学志願を呼びかけている。

(分析結果とその根拠理由) 準学士課程では適正な入学者数が確保されており、これは入学者募集に関わって繰り返し行われている進学説明会や中学校訪問や、本校の特色を進学希望者や一般社会に知ってもらうために行われている各種公開講座、アドミッション・ポリシーに沿った学生を安定して確保するために継続的に行われている入学者選抜方法の見直しによるところが大きいと考え、これらのことから入学者数の適正化は図られていると考えられる。

専攻科課程では、平成11年度の創設以来これまで定員を充足していたものの、平成17年度では推薦選抜、前後期合わせて2度の学力選抜に加えて2次募集を行ったが生産システム工学専攻で初めて定員を充足するには至らなかった。

以上のように、準学士課程の定員充足率は良好な状態を維持しており、専攻科課程でも相対的には良好であり、平成18年度に再び定員の充足を目指して対応策を検討中である。

(2) 優れた点及び改善を要する点

(優れた点) 15歳人口が減少する中で入学定員を確保することが最重要課題となっている。本校の学生の出身地は北海道の中でも他高専に比して広範囲に及んでいる(西は札幌・小樽地域、南は富良野・帯広地域、東は北見・紋別地域、北は稚内・名寄地域など)。旭川市内はもとより、こうした道内各地域の拠点において中学生及び父母を対象とした進学説明会、さらには市内及び近郊のすべての中学校の個別訪問を行い、学校案内及び募集要項の説明を行っている。特に中学校訪問は本校に在籍している当該中学校卒業生の近況を報告する機会にもなっており、これによって中学校との信頼関係が築かれるとともに、本校の特徴についての一層深い理解を得る機会にもなっている。このような継続的な努力を背景に、とりわけ地方からの本校への進学希望者の開拓・発掘に大きな役割を果たしている。

(改善を要する点) アドミッション・ポリシーに沿った学生が受入れているか、また入学者選抜方法の見直しがどのような効果をもたらすかなど、今後検証すべき事柄が残されており、それらをもとに一層の改善を目指す必要がある。

(3) 基準4の自己評価の概要

平成17年度以前は従前からの実践的研究開発型技術者の養成を目指した教育目標に沿って入学者選抜方針を策定し、それを学校案内、入学者募集要項等の印刷物やウェブページに掲載し、さらに体験入学、進学説明会、道内5か所の拠点説明会及び中学校訪問等を通して社会へ公表・周知を行ってきた。平成17年3月に準学士課程及び専攻科課程のアドミッション・ポリシーが制定されたばかりであるが、平成18年度入学者選抜に向けてこれまでと同様に上記手段により入学者選抜方針の一層の周知を行っているところである。

入学者選抜においては、特にアドミッション・ポリシーや教育目標にうたっている能力・適性・資質を有する学生の募集につながるような選抜方法に改めた。具体的には、学力選抜において、これまでほぼ同等としていた学力点と学習点(内申点)の比率を学力重視となるように変更し、さらに英語、数学、理科の学力点に傾斜配点を導入するなど大幅な改定を行った。さらに、推薦選抜においては、面接の評価を参考資料としてではなく、これを数値化して学習点に加算しより客観的な判断を可能とする方式へ改定するなど改善を行っている。また、適正な選抜が行われているかの検

証としては、平成17年度以前から中学での学習成績、入学試験での成績、実力診断試験、入学後1年間の定期試験での結果等の推移を調査しており、学生指導及び入学者選抜方法の改善に役立てている。入学者選抜で学力重視へ方向転換したこともこれらの資料に基づくものである。

本校及び各地で開催する学校説明会と1校に対して複数回行われる中学校訪問を中心とした継続的な取組の中で安定した入学志願者及び入学者が確保されている。また、準学士課程においては入学者が定員を大幅に超えることなく、ほぼ適正な入学者数が維持されており、学生の入学後の学習環境を保証することにもつながっている。また編入学生についても、志願者及び入学者が微増しているが、これは編入後の補習など、学生に対するきめの細かい支援体制が高等学校や社会からより認知されるようになったためとも考えられる。専攻科課程では平成11年度の設置時以来定員の充足率が100～135%で推移してきたが、平成17年度に限っては、定員が充足されなかった。特にこれまでと状況が大きく変わったとも考えられず一過性の結果であると思われるが、一つの対応として、社会人特別選抜者の受入れをも積極的に行うために旭川工業高等専門学校産業技術振興会会員企業に対する募集活動を開始した。さらに、今後も引き続き専攻科課程の充実を図り、より魅力あるものとする努力が必要であるために、各専門学科に対応への取組を求めている。